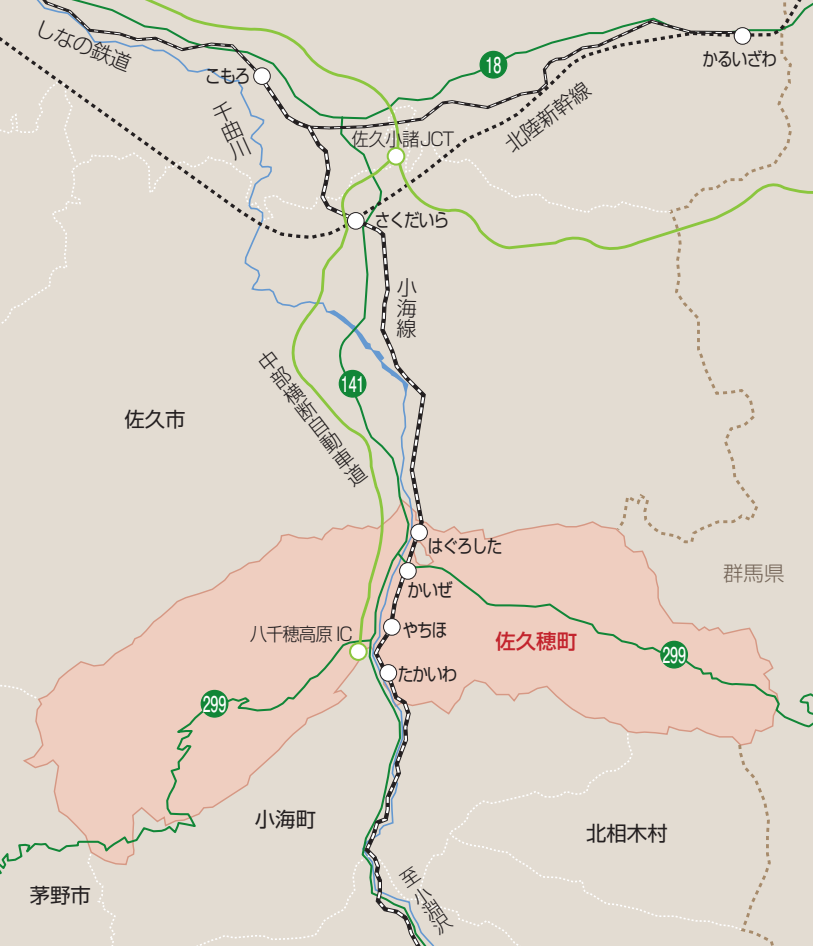
未来につながる ふるさとづくりを目指す 長野県佐久穂町

行政と住民が、それぞれに進める挑戦。
移住者の増加が見られる長野県佐久穂町では、
受け継がれてきたコミュニティを守りつつ、
子どもたちが未来に思うふるさとが育まれている。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

長野県南佐久郡佐久穂町はそのほぼ中央を千曲川が南北に貫き、人々の暮らしを潤してきた。町は川を軸に鳥の翼のごとく東西に広がり、東に「縁結びの山」として知られる茂来山が、西に長野県から山梨県まで八ヶ岳が連なる。



子どもたちに伝えたい ふるさとの魅力

長野県東部の中ほど、南佐久郡北部に位置する佐久穂町は、二〇〇五年に旧佐久町と旧八千穂村の合併により誕生。人口は約一万人を有する。町の中央を千曲川が流れ、西に連なる八ヶ岳をはじめ山々が周辺を囲む豊かな自然が景色を彩る。

標高七四〇～一二〇〇メートルの地帯に集落が広がる、町の産業の要は農業。高い晴天率と昼夜の寒暖差が大きい夏場の気候は野菜の生育に適しており、花卉（かき）やリンゴなどの果実栽培も盛んだ。なかでもプルーンは、国内有数の生産量を誇る。

「合併以降、佐久穂町は『水と緑のうるおい　人の営みが奏でる未来のふるさと』を基本理念としてきました。『未来のふるさと』とは、古き良き時代に戻るのではなく、あらたなふるさとをつくっていくことを意味しています」

そう語る町長の佐々木勝氏は、旧八千穂村の出身。旧八千穂村役場、佐久穂町役場職員を経て、二〇一七年から現職を務める。さまざまな施策のなかでも、未来のふるさとを担う子どもたちの教育で注目されるのは町内の小学校と中学校を統合し、二〇一五年に新規スタートした一貫教育校「佐久穂小・中学校」だ。小学一年生からの英語教育や、職業体験などを通して地域の産業を知る「キャリア教育（ふるさと学習）」がカリキュラムに組み込まれている。

二〇一六年度からは「佐久穂町コミュニティ創生戦略」として、高齢化が進む地域コミュニティの活性化や自立、健康事業に力を注ぎ、集落点検も開始した。

「集落点検の目的は、コミュニティがそれぞれに持つ良さを見つけることです。それをどう残すのか、そのために町はいかにして支援していくかという視点で進めています」

公募により集まった聞き手が住民を訪ね、若い世代に伝えたいという話を聞き取って歩いた調査も興味深い。集落点検の結果をまとめた冊子『佐久穂の集落聴きめぐり』は、写真とともに各集落のかつての営みや風景、

長野県オリジナル品種のプルーン「オータムキュート」のなかでも、糖度の高い大玉を「紫稀～SHIKI～」の名でブランド化し、東京の老舗フルーツ専門店で限定販売。
（写真提供：佐久穂町）

「町の多様な変化にともない、役場の職員の意識も変わりつつあります」と話す町長の佐々木勝氏。背景の壁をはじめ役場の建物には、佐久穂町の森の多くを占めるカラマツがふんだんに使われている。

大日向小学校の生徒や職員のためのランチルーム「大日向食堂」では、保護者が食事の仲間に加わることも。一角には、ワークショップで発表された際の校名が大切に残されている。

忘れられない出来事などが語られた読み応えのある内容だ。

未来のふるさとづくりにおいては、移住者の増加も必要だと佐々木氏は話す。実際、廃校を再活用した新規学校法人の誕生や、これまでに七〇組以上を数える新規就農者により、佐久穂町には未来を培う新しい風が吹いている。

町の活性化を導いた小学校の開校と移住者の増加

町の移住者増加の一つの転機になったのは、二〇一九年に開校した「学校法人茂来学園しなのイエナプランスクール大日向小学校」だ。「イエナプラン」はドイツで生まれ、オランダで広まった「一人ひとりを尊重しながら自立と共生を学ぶ」教育法。細切れの時間割はなく、子どもたちが自ら考えて行動しながら主体的に学ぶ環境が用意されている、と話すのは校長の久保礼子氏だ。

緑豊かな自然環境に恵まれた大日向小学校は、佐久穂町の中心地から車で約10分の距離に位置する。

子どもたちが輪になって話し合う「サークル対話」の様子。対話は、共生を培う土台になる大事な時間。

日本では二〇〇四年にイエナプランに関する書籍（注）が出版され、学習会が草の根的に広がるなか、国内にも学校をとの声が次第に高まっていく。その後、関係者の尽力が実り、長野県と佐久穂町の承認を得て、廃校になった旧佐久東小学校校舎の再活用が決まった。

「この空き校舎がもう一度学校として復活し、若い世代が来るようになれば活性化につながると、佐久穂町には歓迎していただきました」

とはいえイエナプランの認知度がさほど高くない状況をふまえ、開校前には住民に理解を得るための説明会が幾度も重ねられた。

「よそから来て好きなことをやり、結局失敗して去るのではないか、地域のコミュニティが壊れるのではないかとの懸念は少なからずありました。一方で子どもたちが来るのはうれしい、協力したいとの励ましもたくさんいただきました」

校名は地域住民参加型のワークショップで意見が交わされ、学校の正面に立つ茂来山や、地域名の大日向が含まれた。

初年度の応募は当初、三〇名程度を見込んでいたが、結果的には全国各地から七〇名が入学。それにともなって移住した五八世帯の三割が佐久穂町に、七割が隣接する佐久市で暮らし始めた。二〇二二年には中学校が開校し、二〇二三年度は計二〇一名の生徒が五台のスクールバスで登校している。

佐久市に住まいを定めた久保氏は、暮らしてはじめて利便性の高さに気付いたという。

「佐久穂町からJR佐久平駅までは車で約三〇分、佐久平駅～東京駅間は新幹線で一時間二〇分と、首都圏は感覚的に近いですね。新幹線を利用し、東京に通勤している保護者の方もいらっしゃいます」

大日向小学校・中学校の開校は、学校側、町側ともに期待していた以上のあらたな流れも生んだ。

「シャッターが下りていた商店街で、児童のご家族や関係者が飲食店や雑貨店などを開いて人気を集め、賑わいが戻ってきたと評判になっています。学校の理念に共感

校長の久保礼子氏はもともと福岡県の中学校で教壇に立っていたが、イエナプランを知ってオランダへの視察に赴き、日本校の設立にも積極的に関わってきた。

（注）『オランダの教育』（平凡社・リヒテルズ直子）

左／手のひらサイズの「坊ちゃんかぼちゃ」は味が濃い上、少人数の家族でも食べきれるのが特徴。右／80枚の畑をイメージ的にとらえて国の名前をつけるなど、作業管理の効率化にはユニークな工夫が施されている。

し、地域と共に歩もうという思いを持つ保護者が多いのかもしれません」

高等部の開校をも見据える現在の課題は、コロナ禍で滞っていた住民との交流再開だが、ようやくイベントの開催や用水路の掃除、草刈りといった地域活動への積極的な参加が可能となった。子どもたちが住民と笑顔を交わす光景は、やがて周辺の日常になるだろう。

多くの人を魅了する土壌分析を礎とする農法

一九九八年に佐久穂町で新規就農し、妻の幸代氏とともに独自の有機農法を進めてきた、と語る「のらくら農場」代表の萩原紀行氏も移住者の一人。東京での多忙な営業職で体調を崩したのをきっかけに、農業を目指した。

ピーマン、トマト、ブロッコリーなど、「旨みやさい」と名付けられた「のらくら農場」の野菜は見るからに食欲をそそるハリや色つや。健やかに育った証しだ。

「佐久穂町を選んだのは、埼玉での修業時代の夏にこの町を訪れ、涼しさや山々の景色、きれいな水に惹かれてのことでした」

萩原氏の農業の大きな特徴は、土壌を化学的に分析した上で有機肥料の施し方を「設計」し、さらには野菜の生育や実りを「診断」してケアを重ねていくこと。

グリーンケールの畑に立つ「のらくら農場」代表の萩原紀行氏。このグリーンケールをはじめ、収穫した野菜はスタッフとともに試作する賄い料理でテイスティング。購入者には、旨さがより際立つレシピも提案している。

「分析、設計、診断の結果と野菜の種類に応じて、使う肥料の種類や量を調整しますが、それにより最終的には、おいしさはもちろん栄養価も変わってくる。幾度もの試行錯誤を経て数値化が可能になり、コントロールできる形式知が生まれ、現在はスタッフにも理解してもらえるようになっています」

地元の方々から土地を借りて畑を拡張し、生産量は二〇年で二〇倍に成長。現在は約六〇種類の野菜を、専門店やインターネットの直販を介して販売している。実際に食べてみると、春菊は生のままでも爽やかなおいしさが立ち、しっかりしたボディーのピーマンは清々しい甘味が感じられ、リピーターが多いのも納得できる。

栽培から出荷までの作業には二〇名ほどのスタッフが携わるが、経歴は多様。就農経験者だけではなくミュージシャンや管理栄養士、幼児教育の専門家、はたまた短期で働く大学生など、さまざまな人たちがのらくら農場に集まっているのが面白い。

「うちの野菜を食べて、働きに来てくれた人もいます。農業はどういう仕事なのか、漠然とした思いの人でも僕はウエルカム。多彩なメンバーとディスカッションし、アイデアを出し合いながら進められる状況を、僕自身が楽しんでいます」

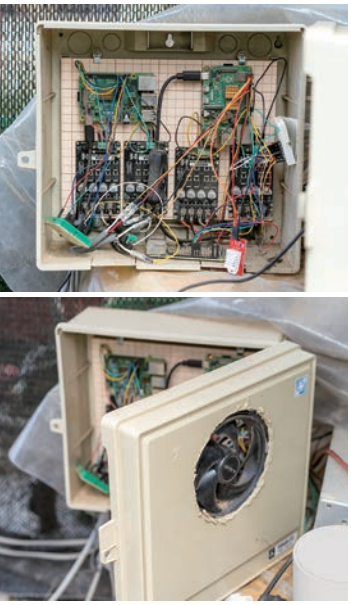
農園で得た知識と経験をもとに独立し、佐久穂町でそのまま農業を続けるスタッフも少しずつ増えており、家族を含めれば五〇人以上が、萩原氏を介した縁がきっか

のらくら農場のスタッフは全員が、畑仕事から出荷まですべての作物に携わる。

けでこの地に根をおろしてきた。

農作業ができない冬場は、漬物やスープなどの加工品を製造。萩原氏は農法に関する講演を行っているが、将来的にはノウハウを会得したスタッフを講師として派遣したいとの構想を描く。町長の佐々木氏や役場の職員とも、積極的に先々を語り合うという。

「人口一万人のこの町は、役場や町長さんとの距離がとても近いし、新しいことに挑戦できる土壌があるようにも感じています」



30棟のハウスをIoTシステムで管理する、手作りの制御盤。機材が増えても自分たちで接続できるため、拡張性が高いメリットもあるという。

最新技術を駆使した空きハウスの再活用

あらたなる挑戦は移住者に限らず、もともとの住民の間でも見られる。離農による空きハウスを活用し、八カ所三〇棟で有機農業を展開する大塚潤也氏も、新規技術の導入で耳目を集める存在だ。

有機農業を手がける父親のもとで四年間働いた後、二〇一八年に独立した大塚氏は、多様な機器とインターネットをつなげる「IoT」に着目。現在は全ハウス内の温度や湿度、照度をセンサーで感知し、ビニールの開閉から灌水ポンプや循環扇、換気扇の作動までコンピューターで制御、管理している。

大塚氏が有機農法でミニトマトを育てる夏のハウス内は、濃密な香りに満ちていた。収穫が終わった後の茎や葉はそのまま砕かれて土に返り、次の実りの礎に。

「最初の頃はすべてのハウスを回り、手作業で調整、管理してきましたが、それに費やされる労力や時間の解消を考えるなかで、IoT活用の発想に至りました」

必要な機器は通信販売で部品を購入し、プログラミングを含めてすべてが従業員とともに構築したDIY。初心者レベルだったが、インターネット上の動画などを参考に制作を始め、約二カ月で完成した制御盤のコストは約二万円だという。

「効率良く適切な管理ができるだけではなく、クラウド上に記録されたデータから温度や湿度と収穫量の相関が見えてきたのは想定外のメリットでした。そのデータを利用すれば先々、より最適な栽培のパターンや管理法が分かってくると思います」

成果は「第六一回全国青年農業者会議」で発表され、大塚氏は農林水産大臣賞を受賞。猛暑が続いた二〇二三年夏も、IoTが支える細やかな散水や循環扇の作動による高温対策で収穫量はアップしたそうだ。

「目指すのは、作る人にも食べる人にも優しい農業。IoTによる労力削減や働きやすい環境づくりと、有機農法で消費者に安心安全な作物を届けることです。農業が今後さらに進化していくなか、自分自身も栽培技術を上げたいですね。この先、空きハウスの増加が予想されるなか、その受け皿になりたいとも思っています」

「センサーによる管理で、病害虫が発生しにくい環境を適切にコントロールできる。そういう意味で、有機農業とIoTはとても親和性が高いと思います」と語る、大塚潤也氏。ハウスの管理システムは、スマートフォンでどこからでも操作が可能。

下／蔵の近くに広がる自社田。稲の間に雑草が多く見られるのは、除草剤を使っていないため。左／黒澤酒造の敷地内では、千曲川の伏流水である仕込み水がこんこんと湧く。

佐久 SAKE Aging 研究会による、日本酒のダム貯蔵が行われている余地ダムと、ダム内での貯蔵の様子。気温が 10 度程度までしか上がらない夏場を含め、年間を通して安定した気温が保たれているため、ゆっくりと酒の熟成が進む。

愛飲家を惹きつける老舗蔵のチャレンジ

豊かな水と米、そして寒さが厳しい冬。そんな自然環境を活かした酒造りにおいて、周囲に先駆けた取り組みを打ち出し続けているのが町で唯一の酒蔵、創業一八五八年（安政五）の黒澤酒造だ。六代目を数える黒澤孝夫氏は、引退した父親の後を継いで二〇一三年から代表取締役社長を務め、弟の洋平氏が杜氏として仕込みを担う。

地元の冠婚葬祭に欠かせない存在である代表銘柄「井筒長」に加え、日本酒愛好家が熱い眼差しを送るのが、一九九二年にアメリカへの輸出を目的として誕生したブランド「黒澤」だ。

「海外への進出としてはかなり早いチャレンジでしたが、父親の同級生がロサンゼルスにいたことがきっかけになりました。味わいや価格を調整するうちにご縁や流通が広がり、今は和食店だけではなくワインショップでも扱われるようになっています」

「町の賑わいや地域おこしに何かしらの形でつながれば、という思いでさまざまな取り組みを進めています」と話す、黒澤酒造代表取締役の黒澤孝夫氏。

現地での知名度は高く、多いときには輸出が生産量の半数を占めるほどの人気ぶり。近年では国内の厳選した酒販店でも販売され、さらなるファンが増えている。敷地内には郷土の文化や歴史にもふれられる資料館やギャラリー、カフェもあり、ショップでの試飲以外にも蔵を訪れた人の楽しみは多い。

二〇一九年には、佐久地方の蔵元五軒と連携して「佐久SAKE Aging 研究会」を発足。佐久穂町にある二つのダム内のトンネルなどを利用する、貯蔵実験が始まった。熟成により味わいがまろやかになるというその「ダム熟」の酒をはじめ、原料米は全量長野県産で六割が近郊での栽培。うち五％を占めるのは、自社田米だ。

この自社田米は、黒澤氏の発案により二〇〇一年から続く「体験型ファンクラブ八千穂美醸会（米作りから酒造りまで）」の活動によるもので、佐久穂町へと日本酒好きを導く役割も果たしている。

「田植えから稲刈り、酒造りまで関わっていただく消費者参加型の取り組みは、当初は契約農家さんにお任せしていましたが、いずれ

2022 年 7 月に、築 100 年超の建物を活用した 1 日 1 組限定の「古民家宿 黒澤邸 hanare」が開業。地域の食材が味わえる料理のサービスにも対応する。

酸がきれいに立つ「黒澤」をはじめ、黒澤酒造の日本酒は和洋ともに食が映える懐の深さがあり、その旨さはカフェ（下）でも味わえる。

は自社の田んぼをと思っていたところに、田んぼが空いたというお声がけをいただき、以来自社田が増えています」

黒澤酒造を訪れる参加者は四季折々、美しい景色の移ろいを感じながら、自らが造りに携わった美酒を味わうのだろう。

コミュニティを守り町を進化させる

各地を巡りながら印象深かったのは、それぞれにあらたな挑戦を楽しんでいるのが伝わってくる、やわらかな笑顔だった。町の変化を住民はどう受け止めているのかとの問いに対する、町長の佐々木氏の答えも心に強く響いた。

「遊休荒廃農地という言葉がありますが、誰もがそうしたくて農地を荒廃させているわけではありません。一方で自分たちが住む地域の魅力には、なかなか気付かないものですが、移住した方々は佐久穂町の良さを語ってくれる。刺激をもたらしてくれる。町の進化・発展のためには重要なことであり、変化を受け入れている住民が多いと思います」

町の変化、進化は地域の産業に確実にプラスの影響をもたらし、さらなる人が集まるだろうと佐々木氏は期待を寄せる。しかしながら移住者を歓迎しつつも現時点においては、町で集合住宅を建築するといった大がかりな受け入れの検討はしていないとも話す。

「田舎のコミュニティには、都会にはないしきたりがあります。誰がどこに住んでいるか皆、分かっているし、水路の掃除や草刈り、冬の雪かきなどを共同で行う慣わしは昔からやってきたことで、明確な理由を論理的に説明するのは難しい。もしそんな暮らしに対する考えが異なる方が急激に増えると、コミュニティが壊れてしまう可能性も考えられるでしょう。ですからまずは、空き家を活用しながら、ゆっくりしたペースで進めています」

子どもたちの学ぶ場に関しては、佐久穂小・中学校と大日向小学校・中学校の教師の交流や共同の研修も行われ、連携が深まっている。大日向小学校には定員があるため、教育を目的として移住した家族にとっても、先駆的なカリキュラムを進める佐久穂小・中学校は頼りになる存在だ。

佐久穂町はゆっくり、ゆっくりと未来へと進む。この町をふるさととする子どもたちは、少しずつ増えていく。彼らの心には、日々の生活で培われる人とのつながりや美しい風景が、自分たちの町の良さとして刻まれていくのではないだろうか。

佐久穂町を訪れる人の楽しみの一つが、自然散策。町の東に位置する「古谷渓谷」は清流の抜井川沿いに遊歩道が設けられており、２筋の滝が流れる「乙女の滝」のほか美しい景色が望める。

八ヶ岳の麓、町の南西部に位置する「八千穂レイク」は、イワナやニジマスなどの釣りをキャッチ＆リリースで楽しめる、家族連れにも人気の場所。近くにはシラカバの群生地も広がる。